

高崎の民俗文化財 「鹿嶋の七日火」と「八幡の鳥追い祭り」

【本日の内容】

- ① 民俗とは何か。
- ② 年中行事とは何か。
- ③ 夏の行事：鹿嶋の七日火 (高崎市根小屋町鹿嶋)
- ④ 冬の行事：八幡の鳥追い祭り (高崎市八幡町相之田・富田地区、上馬場・下馬場地区、西馬場地区)

1. 民俗とは何か (高崎市指定重要無形民俗文化財)

「民俗」としての指定：「鹿嶋の七日火」と「八幡の鳥追い祭り」

(1) 民俗の特色

- ① 地域固有の生活文化で、唯一のもの。
- ② 親から子へ、子から孫へと続いてきた伝承、習慣、祭礼行事など。
- 3世代（親・子・孫）にわたり、約100年間にわたって継続してきた生活の風習や行事、祭り、人生儀礼の生活文化が定着すると民俗（生活文化）になる。
- ③ **私たちの生活そのものが民俗の対象、民俗のおもしろさ。**
- 過去から現在にわたって続けられてきた、ある地方や時代の民俗（年中行事、人生儀礼、家での行事、集団での行事、祭礼行事、食文化、民俗芸能など）について、伝承者に聞き書（インタビュー）し文字や写真で記録し、現在を出発点に過去に遡って、その変化の道筋を明らかにする。

【民俗とは何か…】

①有形民俗と②無形民俗がある

- ① **有形民俗** (形が有るもの。形が残るもの。たとえば、万灯、花火の火薬、鳥追い祭りの屋台、太鼓、笛、鉦、お囃子の唱歌<楽譜>、法被など)
- ② **無形民俗** (形が無いもの。形に残らないもの。たとえば、仕掛け花火、灯籠づくり、お囃子の演目、お囃子の太鼓を叩くなど、これらの無形民俗形を形に残す方法→録音、撮影、写真撮影等を行う)

（2）年中行事とは何か

年中行事とは、毎年、同じ季節や時間帯、同じころにくり返し行われてきた、家や地域（集団）での行事で、毎年欠かさず行われるもの。

No.	名 称	期 日	内 容
1	鹿嶋の七日火	8月上旬。主催者に要確認。	夏の行事。万灯から滝のように降り注ぐ花火は厄払いの意味を持つ。
2	八幡の鳥追い祭り	毎年、1月成人の日。令和8年は1月12日（成人の日）に実施。	冬の行事。小正月の行事。田畠を荒らす鳥たちを、屋台太鼓の音で追い祓う。

◆年中行事の特色

一年のサイクル（四季の移ろい）のなかで、個々の家や地域社会の集団が周期的に行う行事や儀礼である。柳田國男は年間を通して約300日が日常生活の繰り返しという。→残りの日を通常とは異なる非日常の時間と述べ、年間を通して、年中行事の日はちょうど竹の節のように区切りがあって単調な生活にリズムをつけていると指摘〔柳田國男 1999（1955）「年中行事覚書」『柳田國男全集』16 筑摩書房 139〕。日本の年中行事は稻作農耕を基盤に展開するため、四季を通じて農作物の成長（種蒔きから収穫を終えるまで）を軸にした祭りや行事が多い。

○柳田國男監修・民俗学研究所編 1980(1953)「序」『年中行事図説』岩崎美術社

「日本の民衆はさまざまな階層から成っていたが、その中心は農民であつた。そして民間の年中行事には、農耕生活を基盤として生れ出で且つ成長してきた行事が最も豊富である。日本の農耕にはいろいろな種類のものがあつたが、その中心は稻作であつた。そして民間の年中行事には、稻作にちなんだ要素が根幹をなしている。それだから稻作を無視しては、とうてい民間の年中行事の本質をとらえることはできない。」〔柳田 1980（1953） 1〕

○ 大藤時彦 1980(1975)「復刊に際して」 柳田國男監修・民俗学研究所編『年中行事図説』 岩崎美術社

「本来年中行事は経済生活と密接に関係していたものである。とくにわが国の場合、農業と離れては存在し得ぬものであった。したがって生活様式が変っていくと、それに伴う行事も同様の変化を受けることはやむを得ぬことであった。さらに年中行事と離しがたいのは信仰生活であった。以前の経済生活は信仰と深く結びついていた。農業、漁業をはじめあらゆる生業には、それをつかさどる神に対する信仰があったのである。その神を祭り、その力をかりて生産活動をすすめていたのである」〔大藤 1980（1975） 序文〕

2. 鹿嶋の七日火（高崎市根小屋町字鹿嶋の鹿島宮）

「鹿嶋の七日火」は、花火を使う夏の民俗行事。約6メートルある万灯に仕掛けた花火を点火させる。もともと、万灯は先祖や故人を偲ぶ供養の法会で用いるが、伝承地では万灯と花火が一体化されていることに、特徴がある。

令和6年（2024）は8月10日行われた。花火師による打ち上げ花火、お参りに来た子どもに花火を配る。鹿島宮の参道から社殿に、伝承者の手作りの絵灯籠が並ぶ。



写真 1 万灯の仕掛け花火
(高崎市根小屋町字鹿嶋)

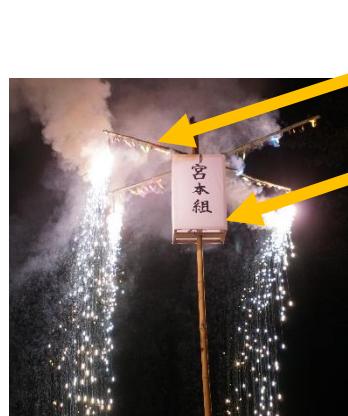


写真 2 万灯 (高崎市根小屋町字鹿嶋) 2024年8月10日撮影



写真 3 参道に設置された小灯籠 (高崎市根小屋町字鹿嶋) 2024年8月10日撮影

2024年8月10日撮影

◆七日火の由来と伝承者

(1) 鹿島宮（高崎市根小屋町字鹿嶋）

- 鹿島信仰の総本社は、茨城県鹿嶋市宮中に鎮座する鹿島神宮。
- 東日本を中心に、古くから航海の守護神、軍神、武神として祀られた。

【七日火に関する古文書】

年代：不明

内容：長瀬讚岐当なる人物（詳細不明）が鹿島大明神と七日火の由来を記した。

→大宝元年（701）8月8日に羅刹國の鬼が日本にやって来て、各国の氏子を襲ったが、鹿島大明神をはじめ各国の神々が鬼を退治したことで、見事に氏子を守り抜き勝利した日が7日（かつて7日の日没が8日の朝とみなされた）で、この日に「鹿島大明神や、その他の神たちが近くにおられるようと感じるよう、神々のところへ詣でて感謝すべきである」〔山崎編 2018 68〕との内容が記される。

《参考文献》

山崎紫生編・大工原美智子 解説・佐々木靖子 挿絵 2018『鹿島大明神の物語』文科創生研究所

(2) 鹿嶋の七日火の歴史と現状の民俗

① 《花火のこと》

- ・鹿嶋の七日火は江戸時代に始まったと伝わる。第二次世界大戦中に一時中断したが、昭和初期に根小屋町で赤痢が流行したため、その厄払いとして花火を上げ、今日まで継続されている。
- ・万灯の仕掛け花火は、もともとは手作り花火。
- 火薬と鉄粉の調合や分量は伝統の技術で、代々地元の高齢男性が共有していた。
- 昭和25年（1950）に「火薬類取締法」が施行で、自家製火薬と手作り花火は禁止。
- この法により、花火は地元の人びとの手から、専門の花火師の手に委ねられた。

② 《絵灯籠》

- ・祭りの準備は祭事の3日前から始まる。令和6年度の参道に置く小灯籠絵は、すべて根小屋町第二町内の人たちが描いてくれた。
- 小学生から中学生、一般の方までが鉛筆、クレヨン、ペン、絵の具で描いた。
- 小灯籠絵の募集のことを地元の方に声をかけてくれたのは、小学生の子を持つ母親であった。子どもを通して友達や知り合いに声をかけることで、16枚の絵を集めることができた。灯籠に貼る絵や俳句を募集するようになったのは、近年のことである。



写真4 木枠を洗う（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真5 鹿島宮の社殿と樹木（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影

③ 《万灯と大灯籠の作り手》

- ・万灯と大中小の灯籠を作るのは、地域の人びとである。その中心は、毎年交代でまわる当番町のコウリモチ（行李持ち）である。
- 行李とは、柳や竹で編んだ箱型の容器である。かつて、責任者が行李に文書を入れて回していたのが由来で、今日も行李持ちが祭事を取り仕切る。
- ・万灯の仕掛け花火は出しているのは、根小屋町第二町内（全7班）にある4つの組（①反目西、②反目東、③下・中・下の二、④鹿嶋東・鹿嶋西）である。

→当日は、午後7時20分ごろから、10分おきに一基ずつ火を点ける。



写真6 鳥居に大灯籠を設置（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真7 万灯にめでたい文字を書く（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月10日撮影

【2024年度の万灯 計4基】

反目西	1基	万灯の四方に貼られた和紙の文字は、印刷物「鹿島宮・家内安全・御祭礼・五穀豊穣」である。
反目東	1基	この万灯は大正時代に作られたもの。万灯の木枠に貼った和紙の文字は、字の上手な人が毛筆で「家内安全・天下泰平・五穀豊穣・鹿嶋宮反目東」と書く。昨年、書いておいた文字（半紙）のお手本を見ながら書く。
下・中・下二	1基	万灯の和紙に毛筆で「家内安全・天下泰平・五穀豊穣・鹿島宮下組」と書く。万灯の木枠は朱色で地元大工の手作りである。
鹿嶋東・鹿嶋西	1基	宝性寺の和尚に、万灯の和紙に文字「鹿島宮・御祭礼・天下泰平・宮本組」を書く。「宮本組」とは「お宮の下」にある集落のことで、正確には鹿嶋東・西字宮本である。

④ 《鹿島の七日火を支える地域の人びと》

- 七日火の花火の財源は、鹿島宮の氏子の寄付によるものである。
- 根小屋町第二町内（全7班）には、約100戸以上の家がある。各班の班長が祭事の前に、それぞれ一軒ずつ訪ねて寄付金を募る。
- 七日火への寄付は、鹿島宮に寄附することと同じ意味。

⑤ 《花火師を歓待した地域の人びと》

- 現在、万灯花火を作る拠点は根小屋第二住民センターである。かつては、大きな農家や養蚕農家で万灯を作った。この家をヤド（宿）と呼び、家人は花火師に火薬をたくさん付けるようにお願いし、うどん、赤飯、スイカなどの食事を出して歓待した。

3. 八幡の鳥追い祭り

(高崎市八幡町相之田・富田地区、上馬場・下馬場地区、西馬場地区)

「八幡の鳥追い祭り」は、冬の行事（小正月の行事で）年の始めに田畠を荒らす鳥（スズメ、ヒヨドリ、オナガなど）屋台の太鼓の音で、追い払う行事である。

現在、屋台太鼓を出すのは①相之田・富田地区（東組）、②上馬場・下馬場地区（上下組）、③西馬場地区（西組）の3地区である。

→数年前まで大門・新住宅（大門南組）も出ていたが、近年は子どもの数が少なく出ていない。

◆八幡の鳥追い祭りの屋台

(1) 各地区的屋台とその歴史

相之田・富田地区（東組）、上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）の屋台を見比べると、ほぼ同じかたちである。屋台上部には紅白のアサガオがつき、そこにたくさんの竹をさし和紙で作った花を付ける。屋台の上に太鼓を乗せ、正面に組名の提灯を6つ設置し、アサガオの下部にも祭りの提灯を多数下げる。そして屋台幕を張る。



写真1 明治34年製 西馬場地区（西組）の屋台（高崎市八幡町 八幡町第二区西公民館）
2025年1月13日撮影

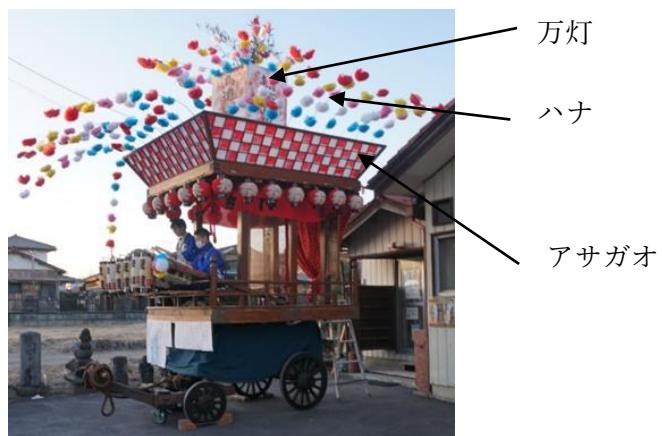


写真2 昭和23年製 相之田・富田（東組）の屋台（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）
2024年1月14日撮影

- ① 西馬場地区（西組）<写真1>の屋台は、3つの屋台の中でもっとも小型である。
- 屋台銘記札の「屋臺新築 明治三十四年一月十五日」が現存。
- さらに屋台底にも「明治三拾四年壱月十五日新調ス」と墨書銘が残る。
- このことから、明治34年(1901)には八幡で鳥追い祭りが行われていたといえ、2025年時点で、少なくとも124年前からこの屋台は使用されている。

② 相之田・富田地区（東組）<写真2>の屋台には墨書銘「昭和二十三年十月 新築落成 相之田富田中 棟梁 大塚作次郎 天下泰平 國家安全 五穀豊穣 養蚕倍収」とある。

→太平洋戦争後の昭和23年（1948）10月時点の地域の人びとの願いが屋台に書かれている。

→東組の屋台は、2025年時点でも77年前のもので、今日もその屋台を使用している。



写真3 上馬場・下馬場地区（上下組）の屋台
(高崎市八幡町) 2025年1月13日撮影

上馬場・下馬場地区（上下組）の屋台
が造られた年銘は確認中である。

◆屋台のお囃子

大太鼓、小太鼓、笛、摺り鉦である。

→相之田・富田地区（東組）の場合、子供連が太鼓を担い、笛と摺り鉦は六郷流保存会が担う。

→上馬場・下馬場地区（上下組）、西馬場地区（西組）：太鼓を叩くのは子どもが中心であったが、最近は少子化の影響もあって大人も太鼓をする。

（2）八幡の鳥追い祭りにみる民俗

① 《道祖神祭りと鳥追い祭り》

・かつての鳥追い祭りは、①道祖神祭りと②鳥追い祭りの2つの祭りが、一連の小正月行事として成り立っていた。

→道祖神祭り：

子どもの行事で、子どものことをドウソジンコ（道祖神子）、ドウソジンナカマ（道祖神仲間）と呼んだ。

昭和20年代の道祖神子に入れたのは男子だけで、その対象は小学校3年生から中学2年生までであった。

→道祖神小屋（1月7日）をつくる：

松の内が明ける1月7日の朝、各家庭の松飾りを道祖神子が集めて廻った。松飾りを竹の柱に積み上げて道祖神小屋を作った。1月14日が鳥追い祭りの日であった・

→道祖神祭り（通称、どんどん焼き）

14日の前日、13日夜に子どもたちは親方（年長者）の家、または道祖神小屋の中に泊まって五目飯を食べた。五目飯の具材はニンジン、ごぼう、油揚げ、ちくわ、シイタケであった。小正月の1月14日の早朝に、正月飾りや松飾りを燃やすドウソジンマツリ（道祖神祭り）が行われた。

►鳥追い祭り

14日の早朝のどんどん焼きの後、夕方から夜にかけて鳥追い祭りの屋台を町内に曳き出し、他の屋台と一緒に八幡八幡宮前でお囃子を競演した。

►現在に伝わる八幡の鳥追い祭り

昭和40年代以降、どんどん焼きが行われた田畠に工業団地ができ、現在は鳥追い祭りの屋台とそれに付随する、六郷流お囃子だけが伝わる。

② 《六郷流お囃子のこと》

屋台で奏でるのは六郷流お囃子で、文正11年（1828）に八幡で生まれた富加津徳太郎（1828～1903）が八幡の地に伝えたものである。後に、富加津は江戸に出て、六郷新三郎に弟子入りし芸能技術を身につけ「六郷」の名を踏襲した。

►晩年は故郷の八幡で余生を過ごし、「六郷流囃子」を地元の人びとに伝習した。

鳥追い祭りのお囃子は「みんば」「しちょうめ」「屋台ばやし」「きりん」「神田まる」の5曲である。八幡六郷流のお囃子を絶やさず後世に伝えようと、伝承地では平成7年（1995）11月に八幡六郷流お囃子保存会を結成した。

③ 《六郷流お囃子の継承・にんべつ集め》

現在、六郷流お囃子の練習は12月下旬から1月のはじめまで、八幡町第二区東組公民館行われる。鳥追い祭りは、もともと子どもの祭りであることから、町内の家をまわり、人別集めをする。これは祭りの運営資金となる。



写真4 鳥追い祭りのお囃子練習の全体

（高崎市八幡町 八幡町第二区東組公民館）

2025年1月7日撮影



写真5 子供連の人別集め

（高崎市八幡町 相之田・富田）

2025年1月7日撮影

④ 《八幡の鳥追い祭りの特色》

八幡の鳥追い祭りは、華やかな太鼓中心のお囃子、屋台同士での叩き合い（3台の屋台が八幡八幡宮前に参集）が行われることに特徴がある。

►八幡八幡宮は上野国一社の武神であり、氏子をはじめ周辺地域の人びとの精神的な支えである。また、八幡八幡宮の門前は多くの人びとが行き交う都市的な面もあったことから、華やかな鳥追い祭りの屋台と六郷流お囃子が発達してきたといえる。今日まで、小正月祭りの欠かせない祭礼行事として、八幡の鳥追い祭りの屋台と六郷流お囃子が人から人へと受け継がれている。